会報

2009.10. 10

第５３号

戦没船を記録する会

〒123-0864 東京都足立区鹿浜２－２０－８
篠原国雄方
Tel・FAX:03-3897-6259　郵便振替 001606-719515
URL:www.ric.hi-ho.ne.jp/senbotusen/
E-mail: senbotu@ric.hi-ho.ne.jp

目　　次

ＤＶＤ作成への取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
故二宮淳祐さんお別れ会
第16回定期総会開催・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
運動活性化に創意工夫
第16年度第１回理事会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
第16年度第２回理事会報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
2009平和のための埼玉の戦争展・・・・・・・・・・・ 6
注目されたアデン湾自衛艦派遣問題
北海道・栄浜の戦没船・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

新しい日本に向けて始動

ＤＶＤ作製への取り組み続く

昨年末事務所を閉鎖して以後も本会は、従来の活動を継紛する努力を続けて来ました。今年に入ってから理事会、総会後も理事会兼運営委員会を２回開催、また５月から８月にかけて横浜、埼玉、清水・静岡のパネル展参加に加え、浜田や徳島への展示パネル貸し出しなどが行われてきました。

特に今年に入って、本会が長年蓄積してきた資料の「ＤＶＤ」化の検討が続いています。未だ収録内容の確定に到っていませんが、多くのご意見を頂いて完成させるべく協議を続けています。会費(一口三千円)納入やカンパにもご協力をお願いしています。

８月30日投開票の総選挙で民主党が308議席を獲得する圧勝で、目本の政治は大きく変わる様相を呈しています。この選挙では自公の大物議員が相次いで落選するなど、自公政権に対する積年の不満が地殻変動を起こしたと見られています。

９月16日に発足した民主・社民・国民新による鳩山内閣は、脱官僚依存を前面に掲げ、国家戦略局、行政刷新会議、閣僚委員会などの機構で、政治主導の政権運営を行う姿勢を示しています。

そして、後期高齢者医療制度廃止や母子加算復活等と共に、大量の不安定雇用やワーキングプアーを生みだした「雇用制度」改正は焦眉の問題です。

無駄な公共事業の典型とされた八ツ楊ダム、川辺川ダムの建設中止や、自動車関連の暫定税率廃止、外交問題では、普天間基地の移転を含む米軍の再編強化やインド洋の給油活動、ソマリア沖の海賊対策などへの新政権の対応も注目される所です。

しかし高速道路の無料化は交通の混雑や地球温暖化防止に逆効果で、とくに海運では内航や旅客船に更なる打撃を与えるものとして、その対応を求める動きが強まるものと思われます。

二宮淳祐さんのお別れ会開催

本会の理事二宮淳祐さん(全日本海員組合名誉組合員・元船船部員協会事務局長)は、昨年９月に入院し人工透折など加療中のところ、４月29日逝去され、５月１日親族による家族葬が行われました。

ニ宮さんは生涯一元場船員として海上労働運動に邁進され、本会の活動にも創立泣当初より参画され、顧問や理事を務めてこられました。

そのため有志の呼び掛けにより、７月18日、マリナーズコート東京で「お別れ会」が開催され、ご遺族や本会、海員組合関係者等70入金が参集されました。第一部では海員組合が作成し二宮さんが出演している映画「船標船改Ｅ」が上映され、海員組合の元組合員土井一清さん、元船船部員協会会長の上村徹さんが、二宮さんの思い出を語りました。

お別れ会では遺影に全員で献花した後、海員組合の藤沢組合員、本会の川島会長がお別れの言葉を述べ、元部員協会安藤会長の発声で献杯の後、多くの方々が二宮さんを語り、ご冥福を折りました。

理事会・運営委員会開催告示

戦没船を記録する会　会長　川島　　裕

下記により理事会兼運営委員会を開催致します。奮ってご参加ください。

記

日時　２００９年１０月２９日(木)　１４時～
場所　東京浜松町海員会館　第二会議室
議題　１、活動報告
　　２、当面の活動・ＤＶＤ作製計画こついて
　　３、その他

第１６回定期総会開催

運動活性化に創意工夫

第16回定期総会は、４月23日1400～1700、東京浜松町海員会館会で15人が出席して開かれた。

議長に副会長吉田敏長氏を選出した。

第15年度活動報告

組　織

実質的な正会員･賛助会員数は、老齢化その他による連絡のとれない人が増加しており確定はできないが、15年度中の会費・寄付金の拠出者は36名であり、新入会者は１名であった。

事務所閉鎖・会の継続

１、「海上労働ネットワーク」が７月総会で解散・事務所撤収を決定する情勢の中で、本会は「検討委員会」を設置し対応を検討してきたが、「本会は解散せず何とか活動を継続すべし、しかし独自での事務所維持は困難」との意見がほとんどであり、第15回定期総会で「会の存続・活動継続、事務所閉鎖方向」を決定した。(会報51号参照)

２、総会後、事務所閉鎖の具体策や閉鎖後の活動に関する検討を継続しつつ準備作業を進め、15年度第２回理事会での確認に基づき、2008年12月29日に閉鎖をした。(会報51・52号参照)

３、具体的措置

○展示パネルは海員組合に保管場所を借りて保管。

○会計・事務関係物＝篠原国雄宅に移管
　その他の資料関係＝栗原三郎宅に移管

○総合機器＝篠原国雄宅に移設
　パソコン・テープレコーダ＝栗原三郎宅に移設

○極力整理することとし、今後の活動に必要なもの以外は、希望者に譲渡または廃棄した。

○連絡先を次の通りとした。

＊事務・一般問題等＝篠原国雄宅
　〒123-0864　東京都足立区鹿浜2-20-8
　電話・FAX　０３－３８９７－６２５９

＊インターネット関連＝栗原三郎担当
　E-mail：senbotu@ric.hi-ho.ne.jp

会議･会合

○第15回定期総会開催＝2008年４月19日、東京浜松町海員会館。会の存続・活動継続を決定。(会報49号参照)

○第15年度第１回理事会開催＝2008年８月７日、東京浜松町海員会館。(会報50号参照)

○第15年度第２回理事会開催＝2008年11月25日、東京浜松町海員会館。(会報51号参照)

○第15年度第3回理事会開催＝2009年３月19日、東京浜松町海員会館。(会報52号参照)

○各地展示会打合会開催＝2009年３月26日、さいたま市PALCO。

会報発行

第49号　2008年　６月　１日発行
第50号　2008年　10月　30日発行
第51号　2009年　２月　10日発行

展示会

○「平和のための戦争展inよこはま」(かながわ県民センター)に参加＝2008年５月30日～６月１日。

○「平和のための埼玉の戦争展」(さいたま市コルソ)に参加＝2008年7月24～28日。(会報50号参照)

○「焼津平和のための戦争展」(焼津市公民館)に参加＝2008年８月１～３日。(会報50号参照)

○「静岡平和のための戦争展」に参加＝2008年8月。

○「浜田市徴用船展示会」協賛＝2009年２月14・15・21・22日。パネル26枚貸与(会報52号参照)

資料収集･整備

○収集＝①豊丸戦時日誌②のうほうく丸･昌福丸戦闘記③島根県船籍船徴用・戦没船④海軍徴用小型船名簿補正⑤戦時小型機帆船⑥その他。

○整備継続＝戦没船員名簿・戦没船名簿。

その他

○パネル作成＝小型戦没船･戦没船員関係20枚

○問合せへの対応＝大分県・徳島県・島根県籍船徴用・戦没船、朝鮮戦争参加機帆船、本会所有パネル内容と貸出、天領丸・第５琴平丸・第51興国丸･その他多数。

○ ＨＰ整備･運用、パネル整備･貸出

第15年度決算報告

（別掲参照）

第16年度活動方針

新規事業の提案は無く、従来からの活動・事業の継続・推進が提案・討議された。

１、　従来活動の継続

事務所がなくなり人の集まる機会が減るが、３カ月に１回、その他必要に応じて会議･会合を持つ、会報を年３回以上発行する、その他創意工夫してできるだけ従来の活動を継続すると共に有効

第15年度決算報告
（ホームページ上省略）

第15年度決算報告
（ホームページ上省略）

化･効率化を図る。

２、諸資料のＤＶＤ作成

○動画も使う等若い人にも見やすく、分かりやすくし、後継者育成にも一役買う配慮を。

○社会アピールできるように。

○どれだけ利用されるか、利用価値があるのか？

等の意見もあったが、理事会等で検討を促進することとした。

３、埼玉戦争展に参加の本年の課題

毎年、埼玉展の本会関係者が協議の上課題を設けてやってきたが、今年は「ソマリア沖海賊に関連する自衛艦の派遣」問題が発生し、この扱いが問題となった。

船員にとって重要であり、社会的にも話題となっている問題なので、本会全体の論議に付し、３月26日に埼玉展の本会関係者が協議した下記概要を含めて討議した。

○「ソマリア沖海賊に関連する自衛艦派遣問題」を本年の課題として何らかの形で取り上げる。

○自衛艦派遣問題全体を取り上げるのは無理、「船員から見た自衛艦派遣問題」として取り組む。

○具体的パネル化の10項目を例示。

今年のパネル化の課題として取り組むこととし、埼玉展のみでなく、各地の戦争展でも展示するケースもあるので、会全体として考え、それぞれ意見を出し、それを踏まえて埼玉班の方で具体化することとした。

４、展示会

今年も各地の展示会への参加またはパネルの貸出しに極力対応する　する。独自展示会の開催は、開催要請のあった場合の対応も含めてを含めて模索する。

５、会報発行

年３回以上の発行に努めることとするが、従来以上に困難も予想されるので対策の検討をする。

６、国への「戦没船・戦没船員の記録整備」の要請

要請の効果、隘路、方法その他具体的なイメージを模索しつつ、引続き検討することとした。

第16年度予算

○従来一般会計は実績を踏まえてということで特に予算を組んでこなかった。特別資金は予算と決算の整合性に欠けた点もあった。

○一般会計の支出は、従来の３分の２(年間30万円)程度である。

○寄付金は金額の設定はできないが、3,000円を目途に多くの人の協力を得る。

○会議参加を含め長距離移動の活動には交通費を支給してはどうか。

○特別資金の一般会計との一本化は、ＤＶＤ作成との関連、その他も含めて検討する必要はあろう等の意見があり、検討することとした。

規約改正

本日出された意見を踏まえて、事務局長が成文し、理事会の承認を得ることとした。

第８期役員

会　長	川島　裕	国際船長協会連盟名誉会長
副会長	小林　三郎	海の平和問題懇談会世話人代表
	中島　洋	太平洋学会専務理事
理　事	吉田　敏長	横浜鴎友会々長　横浜支部長兼務
	青山　昭元	横浜鴎友会
	伊東　信	作家
	上村　徹	元船舶部員協会々長
	柿山　朗(新)	伊勢三河湾水先区パイロット
	岸本　勇夫	元船舶通信士労働組合書記長
	栗原　三郎	船員ＯＢ
	河内山典隆	海事ジャーナリスト
	竹中　正陽(新)	太平洋汽船機関長
	豊田　健造	船員ＯＢ
	中原　厚	元全国戦没船員遺族会常任理事
	新関　昌利	元公立学校教師
	二宮　淳祐	全日本海員組合名誉組合員
	正岡　勝直	船舶史研究家
	山口　喜春(新)	船員ＯＢ
	溝邊　修	船員ＯＢ　関西支部長兼務
事務局長	篠原　国雄	元海労ネット事務局長
監　事	桑島　直矢	船員ＯＢ
	小島　久子	税理士

なお、川島会長は「今後も協力はするが、会長職は若い人に譲りたい」との意向を表明していたが、副会長以下理事が支え、引き続きお願いすることとした。

また、新藤　博志理事は体調不良により退任された。お疲れ様でした。

第16年度第１回理事会・運営委員会報告

第16年度第１回理事会は、６月25日1400～1700、東京浜松町会員会館で12人が出席して行われた。

議長は、川島会長が勤めた。

経過報告

○　５月29～31日、「平和のための戦争展ｉｎよこはま」に参加。来訪者約2,000人。

○　ＮＨＫ大分支局から、漁船徴用に関する問合せと取材があり対応した。

○　徳島県平和･原爆写真展からパネル借用の依頼があり、準備を進めている。

○　理事であった「二宮淳祐氏」が４月２９日他界されました。長い間理事として尽力されました。

労を謝しご冥福をお祈りします。

討　議

A、徳島へのパネル貸与

太平洋戦争における船舶被害は、徳島県では漁船関係が多いが、当地での戦没船に関する初の展示会なので、全体的パネルを主体に漁船関係を適度に組み合せる方向とし、既存のパネルの整備と新パネルの作成をすることとした。

B、ＤＶＤ作製

ＤＶＤの作成について、提案者より「討議資料」提示の上、概要次の説明があった。

１、必要性・有用性

１）　先の戦争は、日本史上最大の事件であり、一般的にもその実態記録の整備は重要。

２)戦後65年を経過したが、戦没船・戦没船員の記録整備・保存が充分ではない中で、本会が取り組んできた記録収集・整備・集約・保存自体が貴重であり有用。

３)今後の運動進展の基盤となり、社会的アピールの一助、過ちを繰り返さない一助ともなる。

４)物理的には①小型軽量の媒体に大量の収納可能②半永久的保存可能③PC機能(送受・検索・編集・コピー・集計･表示その他)を生かした利便性大

２、収納内容

本会が収集・整備した戦没船員・戦没船の実態記録・資料を主体とする。

最終決定は作成委員会等でなされることになろうが、予測されるものは①本籍地・所属別戦没船員数表②戦没船員･戦没船数推移③戦時船舶･徴用船･戦没船明細表、その他22点例示(現時点での予想量はＡ４版換算4,000ページ分、１GB)。

ＤＶＤ収納候補物は、相当量あるので作成には１年以上かかろう。

３） 具体化＝作成委員会・作業班を設置して、具体計画の作成・具体化作業を進めては？

４） 経費＝実態記録のみの収納、作製枚数が300枚程度であれば、業者への外注の質量によるが20～40万円程度となろう。

＜主な意見＞

○これを見れば、戦没船員・戦没船のことが分かるようなものとしたい。

○本会のＰＲも分かりやすく入れては？//動画やアニメも使ってやるとなると、企画・構成・表現・製作技術・費用等の更なる検討が必要となろう。

○ＰＣデスクまたはホームページ(ＨＰ)に残すことではどうか？//保存・管理・活用・ＨＰ容量等に難がある。

○表示・視聴は容易？＝ＰＣ・ＴＶ・プロジェクター等多様な表示が可能。

○これからはＰＣ・ＩＴの時代、ＤＶＤ作製は不可欠。今やらないとやらず仕舞いになる。

○ＤＶＤ作成方向を決定し、やれるものからとりかかれ。

○も１つ具体的イメージが涌かない、収納物の内容等を見たい。

等の討議の上、下記を確認した。

1、ＤＶＤは作製する方向とする。

2、やれるものから取組みを開始する。

3、収納候補物を次回会合でプロジェクターを使って視聴する。

Ｃ、展示用パネル作製

１、徳島へのパネル貸与を機会に、評判のいい「太平洋戦争の戦況と漁船の哨戒区域」を見栄えのいいものに作り替える。

２、ソマリア関係のパネル作成は、引続き会内外の意見・協力を得つつ、埼玉班で作業を進める。ことにした。

Ｄ、次回会合＝2009年８月20日(木)１４００～
於東京浜松町海員会館

Ｅ、その他

○ 呼びかけ文を作って若い人の掘り起こしを積極的にやりたい？

○ 会報発行頭が痛い。戦没戦のことに限らず、会員・関係者の投稿をしてもらってはどうか。

第16年度第２回理事会・運営委員会報告

第16年度第２回理事会は、8月20日1400～1700、東京浜松町会員会館で12人が出席して行われた。

副会長小林三郎氏が議長を勤めた。

経過報告

○ 展示パネル新規作成―30枚、更新―８枚

○ パネル作成に関連して内外から多くの資料提供・アドバイス等を受けた。

○ ７月15日から約２カ月間、徳島へパネル25枚貸与。

○ ７月30日～8月３日、平和のための埼玉の戦争展に参加(別掲参照)。

○ ８月11～18日、清水平和のための戦争展に参加埼玉で展示したものを活用したが、来訪者も多くよかった。来年は、地元でのパネル作成等も検討する由。

○ ８月14～16日、静岡平和のための戦争展に参加来訪者も多くよかった。

○ ４～７月会計報告

一般会計　収入＝17,038円　支出＝19,661円
７月末残高＝453,273円

特別資金　収入＝なし　支出＝45,490円
７月末残高＝1,003,521円

討　議

Ａ、資料ＤＶＤ作製について

（最初に「ＤＶＤ収納候補資料」をプロジェクターで視聴）。

○ 収納資料の項目・内容等の全体提示を//内容を含めた全体提示は膨大なもの故困難だが、個別サンプルや概要提示は可能。実態記録が主であるので、明らかに不適当なもの以外は収納してはどうか。収納容量はあるので、絞込みより収納物を見出す方が大変と思われる。

○ 収納資料項目・経費等は、作成委員会等で決定し、具体的な細かい内容は作業班で判断し、必要に応じて作成委員会に諮ることとなろう。

○ 動画やナレーションも入れたら？//現在は　それらは全く入ってないが、容量的には可能。

次回理事会(10月29日)により詳細な「計画書」を提示して、具体策を詰めることとした。

＜次回会合＝１０月２９日(木)１４００～＞

2009平和のための埼玉の戦争展

注目されたアデン湾 自衛艦派遣問題

「2009平和のための埼玉の戦争展」は、７月30日から８月３日までの５日間、ＪＲ浦和駅前コルソで開催された。

今年の来訪者は、若い人が比較的多く見られ、昨年を大幅に超える13,000人に達した。年齢層にかかわらず、ゆっくりと落ち着いて見入り、解説にも耳を傾ける人が多く、何か世の中変わったのかとの錯覚を受けるほどであった。

戦争展全体としては、「戦争をしないさせない平和の創造を、今戦争をしている場合でしょうか」をメーンスローガンに、多くの人々が協力・創意工夫しながら、ほぼ１年がかりで作り上げた力作パネルが展示され、解説と会話が繰り広げられた。

本会課題への取組み

本会の埼玉戦争展への参加は11回目となるが、毎回課題を掲げて参加してきた。

今年は「ソマリア沖海賊対策として、自衛艦を派遣する」との問題が発生し、社会的にも大きな問題となり、また派遣の主要理由に「海賊から日本関係船舶と船員を守る」が掲げられたこともあり、この課題に取り組むこととした。しかし、この問題の全体を捉えるには過大すぎるので、船員に関係深いことに焦点を絞ることとした。

自公政権は、自衛艦派遣に関連して船員に大きく関係することとして、①日本関係の船舶および船員の安全を守る②日本経済と国民生活を守る―を掲げた。　しかし、

１、船員と船舶の安全を本当に守れるのか？

アデン湾を航行する日本関係船舶は、年間延べ2,000隻としていたが、自衛艦の護衛実績は、４月１日から７月22日までで121隻であり、一日平均1.5隻、年間550隻である。これでは1,450隻は護衛されず、海賊は襲撃対称に事欠かないのである。

また、海賊船や海賊行為の見極めや予防措置が難しいとされている。

２、アデン湾を通過する日本関係船舶の日本貿易物の輸送がどれだけあるのか？

自公政権は、アデン湾の航行が出来なくなれば日本経済と国民生活は大変なことになると国民を恫喝したが、日本の貿易全量に占めるアデン湾経由の割合はそう大きいものではなく、大騒ぎするほどのものではなく、自衛官まで派遣しなければならないものではないとみられる。

３、他に方途はないのか

アデン湾経由以外に方途がない訳ではないのである。喜望峰(南アフリカ)経由との方途があり、現に日本関係船舶の相当数が、この方途を採っている。

この方途は運賃が高くなり、日本経済と国民生活に支障が出るというが、本当にそうなのか。

確かに喜望峰経由は、スエズ運河･アデン湾経由より航海距離で2,769浬遠くなり、諸条件にもよるがその経費増は２～４千万円となる。

他方、スエズ運河通行料(２千万円)、海賊事件による船舶保険料増、自衛艦による護衛経費(１回につき４千万円との試算もある)等を勘案すると、喜望峰経由の方が経費安(２千万円以上との試算もある)となる。海賊の被害を勘案すればより多くの金銭的プラスとなる。その上、海賊の心配もなく、安全も確保できるのである。

４、船員の真の心情

出来れば危険な海域には行きたくない。軍艦なんかに守られながらするような仕事はしたくない。危険は回避したいが、日本国民の多くの努力により多年守り育ててきた『武力によらない紛争解決、諸国民の平和構築』に反するようなことはしたくない。というのが、船員の真の心情であることを、今回の展示準備を通じて再認識させられた。

にも拘らず、能力と努力不足からそれらの半分もパネルに反映させることが出来ず残念であった。

なお、本会内外から多くの資料提供・意見等を戴き、感謝に絶えない。

本会のパネル展示

今回は、約７mの展示スペースに下記のパネルを展示し、４人の会員が交代で解説･運営に当たったが、前記来訪者の半数にあたる6,000人は視聴して

戴いたのではないかと思われる。

＜戦没船・戦没船員関係＞

１、海の平和を願って

２、本籍地・所属別戦没船員数表

３、太平洋戦争の戦況と漁船の哨戒区域図

４、太平洋戦争中の日本船舶および艦船沈没位置図

５、太平洋戦争による海域別戦没船数図

６、年代別戦没船員数表

７、年別戦没船員数表

８、大久保画伯絵－５枚

９、攻撃される日本船舶(米軍写真)－６枚

＜ソマリア海賊関係＞

１、ソマリアの海に平和を(別掲)

２、日本を中心とする海上物流ルート図

３、欧州航路／スエズ運河経由・喜望峰経由図

４、欧州航路／アデン湾経由と喜望峰経由の経費比較表

５、ソマリア近海の海賊関係状況図

６、海賊事件発生件数推移グラフ

７、自衛艦護衛船舶実績表

展示会場での様子等から

○　(太平洋戦争戦況図を見ながら)地図と戦時年を見て当時を思い出した。当時は戦いに勝つことばかりを考えていたが、今にして思えばなんと惨く馬鹿なことをしたものかと、生きていればこその人生があったものを、戦死した友人が不憫でならない。(高齢男性)

○　船員の組合が自衛官派遣を要請したと聞いて、どんな事情があるのかなと疑問を抱いていたが、反対の人もいることを知ってホッとした。ＴＶを見ていると政府与党は「海運業界労使が揃って要望している」と印籠をかざして議論を封殺する態度。国会や国民の論議もそこそこに派遣が実施された。国の根幹にかかわることが軽々しく行われることに非常な危機を感じた。

○　当事者や専門家でないと真実が分からないことも多い、政府や官僚は真実の情報を公開し国民の判断を仰ぐべきだが、それがなされていない。海洋・海運・船員のこととなると、一般人には分からないことが多い、関係当事者がもっと真実を明らかにして欲しい。

○　「欧州航路／スエズ運河経由・喜望峰経由図」と「欧州航路／アデン湾経由と喜望峰経由の経費比較表」は、稀少資料として、８人より縮小版のコピーの所望があった。　　（文責　栗原）

ソマリアの海に平和を

先の太平洋戦争で日本の海運は壊滅的な被害を受けた。船員は60,609人、船舶は商船・漁船・機帆船合わせて7,240隻が海底の藻屑と消えた。船員の死亡率は軍人の倍以上の４３％に及び、海上輸送力はその８０％が失われた。 戦没船を記録する会は、この戦争の実態を後世に伝え、平和と海上の安全を訴える活動を続けてきた。

アデン湾の海賊事件は一昨年の４４件から昨年の111件へと急増したことから米英仏独、ＥＵや中露など２０カ国以上が軍艦を派遣し、日本政府も今年３月、海上自衛艦２隻を派遣した。急増したとはいえ世界の各国が、海賊事件に対し軍艦を派遣していることは極めて異常な事態である。しかも、この海域で海賊行為が増加していることもまた異常というほかない。

日本国憲法は、集団的自衛権の行使や戦力の保持を排除しており、自衛隊の海外派遣や武器使用は「違憲」と目されている。また、平和憲法を持つ日本が、軍事力で航行の安全を確保しようとすることは、船員や海事関係者の平和への願いを踏みにじるものである。

自衛艦の派遣は海上輸送の安全確保を口実にしているが、ソマリア沖の海賊が我が国への物資輸送に及ぼす影響は、スエズ運河経由のコンテナ船が主体で、石油や鉄鉱石、石炭などの産業用資源や食糧、生活物資の占める割合は極めて少ない。またヨーロッパ航路がスエズ運河を回避し、太平洋・パナマ運河経由や希望峰回りでは、６～１０日程度の遠航となるが、運河通行料や安全確保の船団航行のための待機日数を勘案すると、運航上の経費は相当軽減され、日本の海運大手企業では、喜望峰回り採用が増加している。

事実、自衛隊発表によると４月１日から７月２２日の間に、自衛艦が護衛した日本関係鉛は121隻(日本籍船６隻、他は日本船主の支配する便宜置籍船か外国用船)で、自衛艦による護衛は月間平均３２隻であるが、日本籍船は１.５隻というのが実態である。

そして自衛艦の派遣費用は年間182億円、１ヵ月当り１５億円であるから、１隻当りの護衛費は単純平均で4,600万円ということになる。

海賊対策で重要な事は、沿岸諸国の連携による海上警備体制の強化・確立と、何よりも海賊を発生させている地域の民生の安定と治安体制の確立といわれ、東南アジアでは成功している。

われわれは、ソマリアの海に平和を取り戻すために、自衛艦の派遣ではなく、地域経済の再生や民生の安定化、沿岸諸国の協力による海上警備体制の確立強化のため、国際社会と協力、連携して取り組む体制の確立するよう、強く求めるものである。　　**戦没船を記録する会**

北海道・栄浜の戦没船

私は遼海丸への攻撃を見た

札幌市に住む中野義夫さんから「私は遼海丸が攻撃されているのを見ました」というお便りと、2001年に所属する文芸誌「江さし草」に発表した『御真影』というエッセイのコピーを送って頂きました。

中野さんは元公立高校の教諭で、広い北海道のあちこちを転勤されたようで、遼海丸の沈没を目撃したのは小学４年生の時でした。

そして「寿都空襲」という本で、その貨物船が「遼海丸」と知り、戦没船を記録する会のホームページで「遼海丸」の写真を見つけた、とお便りに書いてありました(日本海側の栄浜からは徒歩とバスで寿都から黒松内に出て函館本線に乗る位置にあった)。著者の真意を伝えられるか不安ですが、遼海丸に関連する部分を要約して以下に記しました。『　』内は原文のまま。

目の前で魚雷を受けて沈没

昭和18年８月22目の早朝妹が生まれた。産婆さんが帰って行った昼食後、家に居ても邪魔になるので外に遊びに出かけた。『外は快晴、海は波一つない。我々は無心に遊んでいた。そうしているうちに不思議な事に気がついた。沖はるか向こうを通る大型の船(多分貨物船)がものすごいスピードでこちらへ向かってやって来る。だんだんと海岸に近づく。船の上では船員が忙しく走り回っているのが見える。そのうちに船から海中に向かって機関銃が発射された。二回、三回と続く、まるで海中の鯨でもねらっているみたい。

そのうち今度は、海の向こうからまっ白い線がその船に向かってスルスルと音もなくのびて来たと思った瞬間、船に当り、ものすごい音がして水柱が立った。(魚雷攻撃だった)。しぶきは我々にも届くような気がした。水柱が消えた後、その船は傾いていた。すぐ何隻かのボートが降ろされ、乗組員は東の寿都の方へ避難して行った。』 子供たちは恐ろしさを感じないで、この光景をぼんやり見ていた。魚雷が船に当らないで浜に当っていたらなど考えもしなかった。しばらくして「ヨシオ、何しているんだ、逃げるんだ」と父親に言われてもこの光景に見とれていて、もう一度逃げるんだと言われてみんなの後を追って裏山に逃げた。

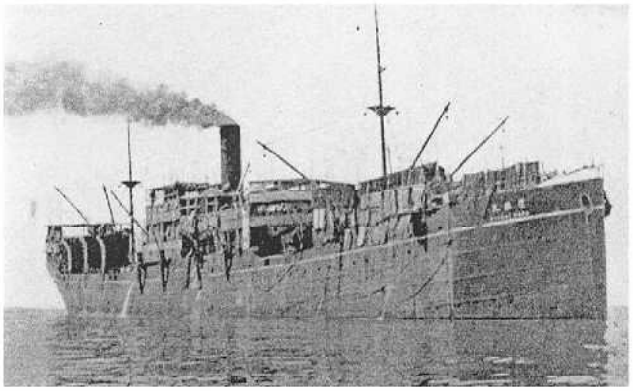
子供たちが船の沈没に見とれている間に、『平和な漁村の人々は突然のものすごい音にびっくり仰天し、地域センターとも言うべき学校に集合した。父はすぐ、一人の若者を原歌にある敵飛行機監視所へ報告すべく、自転車を走らせた。次に慌てふためく人々を落ち着かせ、裏山に避難させた。それから、朝に生まれたばかりの赤ん坊と母も裏山へ避難させた。』 校長である父はみんなを裏山に避難させたがどうも人数が足りない。おかしいと校舎のあちこちを大声で探したが誰もいない。ふと海岸を見ると子供たちが見えたので、大急ぎで避難させたのだった。

『次に父は服装を改め、白い手袋で静かに奉置所から御真影を取り出し、うやうやしく手にし、みんなの避難している所へ運び、そこの一番高い所に置き、そばにじっとしていた。』 どのくらい時間がたってからか、瀬棚の方から翼が二枚ある飛行機が飛んできた。胴体に日の丸が書いてあるので日本の飛行機だとみな安心した。この飛行機はさっきの沖の上を数回もまわってから、黒いミカン箱のような物を落とした。爆雷だ！その瞬間、我々はみな立ち上がり何回も万歳をした。涙が流れた。

帰路は御真影を先頭に我が家へと向かったが、海上にはあの船は見当たらなかった。沈没したのだ。

『翌朝早く、父は遠い(10キロ以上もある)元町にある村役場(今の教育委員会)へ自転車で向かった。きっと御真影の無事を報告したのだろう。』

この御真影は終戦の年の秋、倶知安の後志支庁に回収され焼却された、後志支庁に届けるのにどうするか。終戦をよしとしない連中が御真影を奪還に来たら大変と協議し、先頭に村会議員長老のＹさん、父の前後に呼び子と木刀を手にした若者で固め、無事届けた。父がこんな厳重にガードされて出かけたのはこれが最初で最後、今思うと実に滑稽そのものでも、当時は真剣だった。



遼海丸
日本水産　4,882総トン　1943(昭和18)年8月22日、カムチャッカ発新潟向け航行中、14時33分頃北緯42度41分、東経138度54分（寿都白糸岬北東4千付近）において右舷に三発の被雷をうけ二分後に沈没。